

コラム 西洋古代史の泉 3

オートンのローマ遺跡

南 川 高 志

フランス中部、ブルゴーニュ地方の町オートン（Autun）は、紀元前15年にアウグストゥスによって築かれた、2千年以上の歴史を持つ都市である。ローマ時代はアウグストドゥヌム（Augustodunum）と呼ばれた。この都市がローマ時代に辿った運命については、本誌掲載の西村昌洋氏の史料翻訳・解説（とくに80-83ページ）に詳しいので、ここでは現在の遺跡の様子などを紹介しておこう。

実はこの町、鉄道幹線ルートからはずれており、車を利用できる場合はともかくとして、公共交通機関を使っても、パリからもリヨンからもなかなか訪問しにくいところにある。ローマ史に関心のある者であっても、日本からの短期旅行の場合は、南仏やリヨン、ヴィエンヌあたりで日程は一杯であって、オートンまで訪ねる方は少ないと思われる。アクセスは、パリ・リヨン駅からディジョン経由では2度乗り換えして3時間以上、あるいはパリやリヨンからTGVを使ってル・クルゾ TGV 駅まで来て、そこからバスで45分ほど。私は後者のルートを利用したが、ル・クルゾに停まるTGVもそこからのバスも便数が少ないので、待ち時間が長くなる。しかし、オートンは時間を使ってでも訪れる価値のある町である。貴重な遺跡の存在だけがその理由ではない。歩き回ってみて、フランス語の単語でなくて恐縮だが、cozy という英語の単語が当てはまりそうな感じの、気持ちの良い印象の町だからである。

ル・クルゾ TGV 駅からのバスは町の中心部、シャン・ド・マルス広場に着く。歴史ある都市の部分は市の中心部に集まっており、ローマ時代の市域も半日で全部回れる程度の広さである。一般的な観光の見どころは、12世紀前半に大部分が建造され、尖塔が15世紀に造られたロマネスク式の大聖堂、サン・ラザール大聖堂と、12世紀の彫刻「イヴの誘惑」や15世紀の絵画「キリスト降誕」を所蔵するロラン美術館であろう（ロラン美術館にはガロ＝ロマン時代や古代終焉期の展示物、ギリシア語文言のあるモザイクなどもある）。これらは皆、市の中心部、市庁舎や広場があるところからすぐの距離にある。これに対して、ローマ時代の遺跡は、かつつのローマ都市の市壁部分、あるいは市壁の外に残っている。

ローマ時代の町の中心であったはずのフォルムの正確な場所は不明で、遺跡が残っている市門から様々に推測されている。しかし、4つの市門のうち、保存の良い門は2つだけである。まず市の中心の広場から北東の方角、ディジョン方面からオートン市街に入るところに、高さ20メートルの「サンタンドレ門」（Porte Saint-

André)が立っている(写真1)。ローマ時代の町の東門、つまりデクマヌス・マクシムスの東端にあたり、ウェソンティオ(現在のブザンソン)方面へはここから出発した。門の両端にあったと思われる張り出し部分や上部の屋根のある構造物は失われているが、どっしりとした風格のある門である。

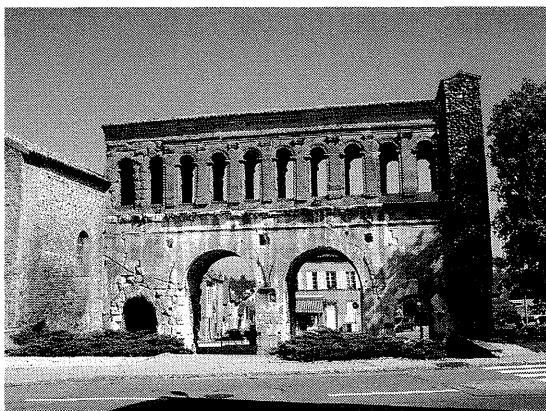


写真1 サンタンドレ門

市の北西には、北から市の中心へと向かう道路 D980 がアルー川を渡るところに、アルー門 (Porte d'Arroux) が残る(写真2)。この門がかつてローマ時代の市の北門、つまりカルド・マクシムスの北端に相当し、人々はここからオーセール方面へ出かけた。アルー門は高さ14.9m、幅19mで、やはり上部の屋根と部屋の部分は失われ、アーチ構造のみ残っている。

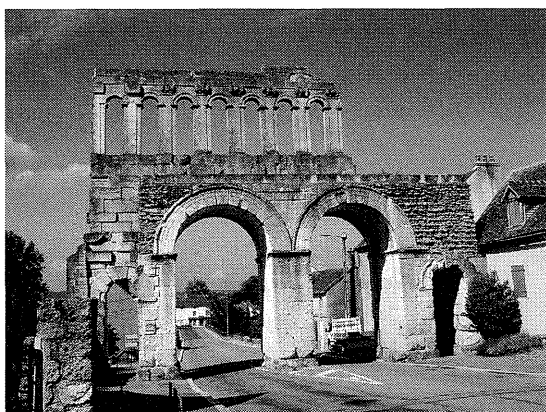


写真2 アルー門

この門の北方にローマ時代には劇場があり、1976年に航空写真で発見されたが、地上で見られる遺跡はなく、市の東側に実際に残る劇場から想像するしかない。その失われた劇場があった地点の少し南側の牧草地の中に、「ヤヌスといわれる神の神殿」(Temple dit de Janus)が立つ(写真3)。これはきわめて印象的な神殿跡である。もとは高さ24mで、

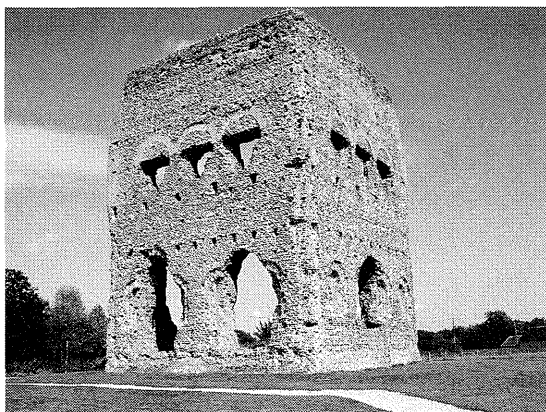


写真3 ヤヌスといわれる神の神殿

正方形に近い平面プランは16m四方であったと推

測されているが、現在残っているのは儀礼空間の核となった部分（ケッラ）だけで、その広さは9m × 8.5mのサイズである。この神殿をヤヌス神に結びつけたのは16世紀の歴史家ピエール・ド・サン＝ジュリアンで、その遺構が立つ場所から推測したようであるが、今日では誤っているとされている。神殿に備わっていたと思われる2層の屋根などは失われて、側壁が2面のみ残る。いわゆる「ガリア」風の神殿であり、現在残されている遺構も、同じフランスのローマ時代の神殿でもニームやヴィエンヌに残る皇帝礼拝に捧げられた神殿とはまったく趣が異なっており、非常に興味深い。オータンのシンボルとしてその写真があちこちで使われているが、私が訪れた時には、よい天気の日にもかかわらず、他には遺構の写生をする者らが数人だけで、残った側壁のニッチの一つにフクロウが1羽じっとしていたのが記憶に残っている。

オータンで最も規模の大きいローマ遺跡は、市の中心から東の方角にある劇場（Théâtre romain）である（写真4）。この遺跡のすぐ東側はグラウンドと池になっており、劇場に座ると遠くまで見晴らしが利く。この劇場の直径は147.8mで、現在は復元されて催し物に使われている。劇場の北側に1世紀に造られた円形闘技場があり、楕円形構造の全体の大きさが154m × 130m、アリーナ部分の大きさは74m × 49mであったことがわかっているが、ローマ時代の構築物全体を想像できる遺構を見ることはできない。

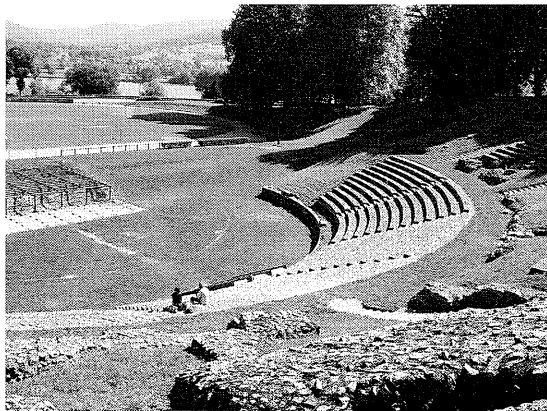


写真4 劇場

このオータンの町、現在の人口は1万7千人程度のものである。コルシカからフランス本土にやってきたナポレオン・ボナパルトが1779年1月に入学し、フランス語を学ぶためにごく短期間在学した宗教学校（リセ）が今も残っている。街道の立て看板によれば、オータンは、ロンドンとケンブリッジの間にある郊外都市ステイーヴニッジや日本の川越市と姉妹都市になっているとのこと。また、2010年11月8日付け朝日新聞朝刊の「天声人語」によれば、今年の夏ブルゴーニュ地方の古城跡を買い入れて石造りの塔の内壁に壁画を描き始めたフランス在住の日本人画家、高橋久雄さんは、フランス政府公認の壁画修復家にして、オータンの名誉市民とのことである。こういう方がオータンのローマの遺跡をどのように御覧になっているのか、ぜひうかがいたいものである。（写真は筆者自身が撮影したものである。）